慈光

昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和三十年五月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
（通第七十四号）

目次

虚仮を照すもの……花田正夫…（1）
願成就文講話……福島政雄…（3）
無義爲義の念仏……榊原德草…（9）

第七卷　第五號

虚假を照すもの

花田正夫

フランスの文豪、モウパツサンの小説に、真珠の首飾りを中心にして、人生のむなしさを知らされる、深刻な物語りがあります。

それは、首都パリーの街はづれに、年若い官吏夫婦が住んで居りました。或日、パリーの立派な人々の集る盛大な夜会の案内状を受け取りました。そこで夫婦であれこれと苦心してどうにかその夜会に出席するにふさはしい服装だけはととのへましたが、一番目立つ首飾りがあまりに粗末すぎるので、それが苦の種になりました。思案投げ首の夫人の胸に、或富豪の奥さんになつてゐる幼な友達の一人が思ひ浮びました。そこで早速その友達を訪ね、豪華な真珠の首飾りを借り受けて、嬉々として帰りました。

待ちに待つた夜会は盛大に挙行せられました。賑かな音楽に酔はされ、美しく飾られた部屋で、我を忘れて踊り、歌ひ、談笑して過しましたが、フト気付きますと、友達から借りた大切な首飾りを失つて居りました。早速百方に手を尽して探し求めましたけれど、総ては空しいことに終りました。

そこで仕方もなく、莫大な借金をして、もとの首飾りと寸分たがわぬ立派な真珠を買ひ求めて、血を吐く思ひで、富める友達に返却しました。然し小官吏の身分としては、その巨額の借金を返済するには、十年餘りの屋根裏生活を続け、寸時の休みもなく内職もして行かねばなりませんでした。春が来ても花を見ず、秋になつても紅葉も知らずにそれでも、苦節十年餘、長い辛苦に堪えて、その最後の借金の支払を終へた時『今迄は何も言はずに来たけれども一度この苦労話を聞いて貰ひたい』と思つて、友達の家を訪ね、十年餘の苦心談を打ち明けました。

ところが、その友達は、ビツクリして『あッ！あなたはあのお貸しした首飾が模造真珠だつたことを御存じなかつたのですか！エッ、ほんものと思つたのですか！……』と覚えず叫びました。これを聞いた彼女は、茫然自失、涙も出ない、ものも言へないといふ始末でした。南無三！取りかへしのつかないことをした。模造の真珠を真物とばかり思ひこんで、自分の半生は台無しになつて了つた。十餘

年の屋根裏生活で自分の青春は吹き飛んでしまひ、毛髪はすでに白を帯びている！彼女は青春になつて恰も全身の血が失せた如くに、そのままぐつたりと崩折れてしまひました。

大体こんな物語でありますが、これによつて、われかしこしと振舞うて居ります私共の浮調子な生活に、警鐘を乱打してやまぬ文豪の心に触れるのであります。それにつけても

月花や　四十九年の　無駄　歩き

といふ一茶の句を思ひ合せます。若冠十五、継母と折り合いが悪るく、仲に立つてこまりはてた父が、雪深い山路を信濃の善光寺まで送つて、はるかな江戸に一人旅立たせたのでした。それから萬難辛苦の末にやうやく俳諧師として世間に名も知られるまでになり、明月に酒を汲み、上野の桜に句会を催し、御師匠、御師匠とあがめられるまでになりましたけれど、自分の生活そのものは、旧態のままで継母といさかひ、異母弟の仙六といがみ合ふといふ泥沼のあえぎでありました。

思ふまい見まいとすれど我家哉
故郷は蠅さいわさを刺しにけり

斯うしたのたうちのはてに、不惑の年といふ四十もすぎ知命の年と呼ぶ五十も間近になつて、始めてこの一句、月花や……が出来たのでした。それから江戸を引き払つて雪国に帰り、やうやくのことで仙六とも和解し、土蔵を修繕して家と作りかへ、初めて妻を迎へたのは五十も過ぎた頃でした。

明月の御覧の通りの層家哉
あばら家のその身そのまま明けの春

といふ心境がひらけて居ります。然し生活そのものは思ふことの叶はぬことの多いものでありました

苦の婆婆や花が開けば開くとて
春の夜は春の夜ながらさりながら

でありますが、その無常転変不如意の底にあつて一つの諦観を得て

ともかくもあなたまかせの年の暮

と、よきことも、あしきこともおのが業報にまかせて、ひとへに本願をたのむといふ、やすらぎに到達して居ります。善もほしからず、悪もおそれなしといふに充分な本願の念仏を仰いで居ります。

斯うしたことを知らされるにつけ、真実心の徹到といふことが、如何に大切であるか、そしてまた至難であるかといふことを想ひ、いよ〳〵祖聖の恩徳を感佩申すことであります。

願成就文講話

福島政雄

さうすると、やつぱりそこに信心欲喜と云ふのは、体も喜び、心も欲ぶ、といふ事ださうであります。そこに信心が開けて、何とも云へない喜びがおこるのであります。これもであります、それもあまりよろこびと云ふ事を期待すると、をかしな事になりますのであります。

私なんか、何時も申し上げます様に、二十六歳の夏に、近角常観先生のおかげで、心機転換致しました。その時は何とも云へない、信心欲喜といふ様な心持ちが、一週間ばかりも続きました。それがのちになると、そのまま続くものでありませんから、あの時のあの心持はどうなつたかと云ふ様なことを考へる様になる。そして信心欲喜と云ふ様なものがないと本当でないのかと考へる様になる。そこをもう一つ抜けてまゐりましたわけであります。

いや信心欲喜といふ事をあてにしてゐたのが間違ひで、本当のところは、信心欲喜といふものが、あらはれようがあらはれまいが、仏のほことと云ふものは、どこどこまでも変りはない、それを頂いて行くと云ふことになつて『乃至一念』でありまして、そこに南無阿弥陀仏の称名念仏申される。これもであります。称名念仏申しましても、皆様よく御体験になつて居りませうが、自分が今から念仏称名するぞといふ様な念仏称名はつけたりのものであります。さうでないのでありまして、何時とはなしに自然に南無阿弥陀仏の称名が浮んで来る、それは苦しい時も浮んで来、それから有難い嬉しい時にも浮んで来る。或は苦しい所をずつと通つて来てホット一息ついて、その時に思はず、南無阿弥陀仏の称名が浮ぶと云ふ様な事でありまして、これは、自分が今から念仏称名しようと思つて念仏称名することもないぢやありませんけれど、そんなのはむしろ自分の作り事である様になるのであります。さうでなくて、自然と浮んで来る自然と浮んで来る念仏称名といふものは、仏のまことが通うてそこに浮んで来る称名念仏であります又自然と浮んで来る称名念仏といふものは、何となしに自分の煩悩の苦しみなり心の暗さなりをやはらげ、又照して来るといふ様なものでありまして、信心欲喜と云つても飛び上る様なものでなくて、何とも云へないうるほひを自分の苦しみの底、闇の底に感じて来ると云ふ様なのがお念仏

の味ひであると云ふ風にだんだん頂いて参つてゐるのであります。

さうでありますから、私の場合はむしろ両親が死んだあとがずつと種々の苦しみが多く続いて、そして今日まで続いて居りますのでありますが、その苦しみの中に、自然と浮ぶ念仏称名であります。

でありますから『信心欲喜』のあとに『至心に廻向したまへり』と親鸞聖人が、ここをお読みになつてゐる。これは非常に有難い事なのであります。その念仏称名といふものは、仏様の真心からして私共に、めぐらし向けて、与へられたものである。私共が真心をもつてお念仏申してそれを仏様の方にさし上げると云ふのでなくて、向ふの心がこちらに徹つて、ひびいて、そしてそこに念仏称名がおのづからに浮んで来ると云ふのでありますから、それだから『至心に廻向したまへり』と仏様が私にそのまごころを以て称名念仏をめぐらしむけて、与へて下さつてゐるのであります。これはやつぱりこの大無量寿経といふものを、親鸞聖人は、御自分の御信心の味ひから味つておいでになるのでありまして、普通の読み方はさうぢやない様であります至心に廻向といふのを我々衆生の方につけて読むと云ふのが普通の読み方なのであります。親鸞聖人は信仰の境地からお読みになりますので、さう云ふ読み方、又さう云ふよみ方であつて始めて私共にここが生きて来る、と云ふ事なのであります。

そして『彼国に生ぜんと願ずれば、即ち往生を得て不退転に住せん』と。仏のお浄土に生れることを願ふと、さうすると即ちであります。即得往生、即ち往生で、この往生といふのは今日の俗な言葉では録でもない意味に使つて居りますけれど、「今日は往生した」と云ふ様なあんな事を云つて、言葉の墮落であります。さうでなくて、お聞きになつて居ります様に、仏法での往生は、非常に有難い意味なのであつて、仏のお浄土に往つて生れるといふのであります。そして『即得往生』忽ち往生することを得といふ、即得往生といふ味ひは、何処にあるかと申しますと、仏様の『至心廻向』それがわが身の上にひびく時が、即得往生であります。

この世の中にまだ生命を持ちながら正定聚の位に定まつた、その味ひが、即得往生である。そこが非常に大事なところでありまして、そこは読み方次第で、イヤさうぢやない、それはやがて人間の生命は短いものだから、忽ち死ぬ時が來て、そして仏のお浄土に往生するのだと、かう解釈出来ぬものではないけれども、本当のところはさうではありますまい。『往生定聚』と申しますが、この世の中にありながら、正定聚の位になると云ふところが即得往生である。この世の中にまだ生きてるんだけれども、自分は仏の

お浄土に往生するに定つてゐる。まだ学校にはいつてゐないけれど、入学試験に通つて、もう学校にはいる事にきまつてゐる、その味ひが即得往生、そして住不退転でありまして、さうなつて来ると、もう退転せず、その位から退いてしまふと云ふ事はない、これはこの不退転といふ事は信心定まると云ふ事と、不退転といふ事とが同時であるのであります。

よく世の中で、自分は始めは仏教であつたが、斯様々々でキリスト教になつたとか、他の宗教になつたと告白しておいでになる方がありますけれども、それは仏教の世界がまだ開けていらつしやらなかつたのでありまして、この親鸞聖人の御信心の世界がひらけて居られれば、もう住不退転でありまして、よその方へ転んで行くと云ふことは決してないのであります。

それは私が二十六歳の夏に始めて親鸞聖人の信仰の道に心を向けさせて頂きまして、それからもう、三、四、五、六と四十年程経つて居ります。その四十年の間には色々な事を致して居ります。今申しました迷ひの世界にもずゐ分はいつてゐると云ふのは、哲学の本を、西洋哲学の本を読んでみたり、その他の色々の教を読んで見たりして居ります。けれども他の教を読むといふ事が、この親鸞聖人の道より他に自分の進む道はないと云ふ事をいよいよ明らかにして頂くたよりになつてゐるのでありまして、二十六歳では親鸞聖人の道にはいつたが、今度はプラトンの哲学を読んでプラトンに変つたとぶわけのものでない。成る程プラトンなんかを熱心に読みましたのは三十代の頃であります。ペスタロッチーといふスイスの大教育者の本も熱心に読んで居ります。それぢや私が、親鸞聖人の道を捨ててプラトンに行つたり、ペスタロッチーに行つたり、あつちにさまよひ、こつちにさまよひしてるかと云ふと、決してさうではないのであります。

プラトンを読めば読むほど、ペスタロッチーを読めば読むほど、自分は親鸞聖人の道に生きさせて頂くより他は無いといふ事が、いよ〳〵はっきりとなつて来る。プラトンの歩んだ道なんか、私が行けるものぢやない、ペスタロッチの行つた道を私なんか微塵も行けるものぢやないと云ふ事が、ペスタロッチーを研究すればする程はっきりとなつてまゐります。

それからまあ、哲学といふものはそんなに私は読んで居りませんけれども、カントなんかも、読んだこともまあ無いと云ふ方が本当でせうか。フイヒテなど云ふ哲学者のものを少しは読みました。然し結局私にはわからなかつたといふのが本当であります。哲学も迷ひの世界であると云はれる仏教の云ひ方といふものが、私には本当としか受けとれませんのでありまして、やっぱりカントだ、フイヒテだ、ヘーゲルだと云ふ様なことを云つてるのが、迷ひから迷

ひをいつてゐるのである。本当の処を云へば、カントならカントを私が本当に読んだならば、いよいよ親鸞聖人の道より他ない、自分の行き先はないと、かうなつて来ると思ふのであります。然しカントをそれほど読んぢやをりません。さういふことなのであります。

尤も西洋の哲学の中でも最近の哲学と申しますか、それは何分死ぬる問題、人間の死の問題を痛切に考へて居りますところの哲学がある様であります。それも私はあまりよく読んで居りませんけれども、ドイツの哲学者のハイデッカーの哲学なんかはそれその様であります、実存哲学と云つて居るやうでありますが、さう云ふ哲学を紹介したものを読んで見ますと、私の感じますことは、ああこの哲学者達はやっぱり迷うてゐるのぢやないか、と云へばこつちが傲慢な様に聞えますけれど、どうもさう云ふ感じがするのであります。もう一歩深く来ると親鸞聖人の所へ来るんだけれども、死の問題を問題として、しきりにああ云つたり、かう云つたりして苦しんでるが、気の毒なもんだと、かう云ふ感じがするのでありまして、嗚呼この人達、かう云ふ苦しみの人生といふものを哲学で説いてゐる、そこを通るのはいゝかも知れない、そこを通つて、そして親鸞聖人の道、大乗仏教の教といふものにはいつてくると、そこに苦しみながら落ち着きが出来て来るのぢやないかと、かう云ふことを思ひまして、今の最近の西洋の哲学を読んで見ましても、まだこれは迷ひの状態にあります。尤も私がさう云ふ迷ひを持たないと云ふのではありません。私自身は矢っ張り迷ひを持つてゐるのでありますから、さう思ふのであります。併しさうした人達に、親鸞聖人の道がもう一歩開けたならば、その迷ひの苦しみの中にありながら落ち着きが出来てこようものをと云ふ様なことを考へます。そこで昨年まで熱心にここに来て聞いて下さつたあの山田宰さんなんかが、今ベルリンに行つて居られますが、出立なさる時に、どうぞこの親鸞聖人の教を説かれてありますところの、近角常観先生の、この信仰之余瀝と云ふ御本を持つて行つて、ドイツ語に訳して、ドイツの人が読む様に出版出来る様になさらんかと云ひましたら、喜んで持つて行かれました。何でもこの頃では日本語はチット忘れて、ドイツ語の方が達者になつたとか云ふお便りがあるさうでありますが、結構なことでありまして、その調子でもつて、大乗仏教の殊に親鸞聖人の宗教を本当にわかつた、さう云ふ方がドイツ訳をして、ドイツの人々に読んで貰へたならばさうすると、そのハイデッガーの哲学なんかに一歩進んだ世界がドイツの人に開かれるだらうと、こんなことなんかも考へて居りますのであります。

さて、この成就文の最後の所が、前の第十八願の終りにありました様に『唯除五逆、誹謗正法』で、五逆罪を犯し

た者、まことのみのりを謗つた者は、これは取り除けだとかう云ふお言葉がある。取り除けだと云はれる意味は前にも申しました通りに、これは一番気にかかる、かう云ふ所であります。一番気にかかるから取り除けだと、親が子供を勘当する、この子は勘当だといふのは、その子が一番気にかかつて、何とかしてこの子供がまことの道に立ち帰つて来ないかと思ふものだから、お前は勘当だと、かう云ふ事になつて来る、その親の心持ちであつて、五逆罪を犯した者、誹謗正法罪を犯した者、さう云ふ者は取り除けであると云はれます処に、何とも云へない慈愛の親心と云ふものがそこにあらはれてゐる。

これは広く申しますれば仏教には折伏と攝受と二つの面がありまして、折伏と云ふのは悪い者がゐる時に、それをどこまでも打つてこらして、直してやらうと云ふのが折伏であります。攝受と申しますのは、その悪い者を何処までも温めて、その悪い所をとかしてやらうと云ふのが攝受であります。

そして実際問題になりますと、私共衆生といふものはどうか、折伏と攝受と両方使つて頂かないと、なか〳〵目がさめないものであります。それは結局のところは攝受であります、仏のお慈悲といふものは攝受であります。けれども只可愛い〳〵で温めると云ふ丈ではなか〳〵私共の目がさめるものではないのでありまして、コイツけしからぬ奴だ、打つて叩く、かう云ふ処が出て来て、その恐しい所を感ずる、その恐しい所を感じて、それからあたたかに包み入れられるところを感ずる、そこで人間といふものが仏のまことの中にとけて行きますのであります。

私自身のことを考へますと、たしかにさうなのであります。よつほど一方では折伏されないならば自分の姿といふものが見えるものぢやない、余ッ程ひどく打つて叩かれて、それからこの広い仏様の温い心に包まれるといふことになつて、始めて自分の姿といふものが見えて、涙が出る様になつて来る。さうでありますからして、この『唯除五逆、誹謗正法』と云ふ所は、仏様の折伏のまことの力といふものが、私に加へられてゐるのである、又かう云つて頂いて始めて私の五逆の姿、誹謗正法の姿と云ふものが見えて来る。こんな奴はたすからぬぞ、と云はれて、我が身をみると、今迄はさうも思はなかつたが、成る程、自分は五逆罪を犯す身である、誹謗正法の身であると言ふことがわかつて来る。私の様な鈍い者はことにさうなのでありまして、そこまで言はれぬとわからぬのであります。よい加減に人間といふものはかうすべきものだと、所謂倫理道徳の教で非常に正しい立派な所を説き聞かせられる、さうすると、それを聞いて、自分もそんなに立派になつた様な気持ちになつて、い〳〵気になるものでありまして、お前は十分、よつほど立派な者と思つてゐるかも知れないけれども、お前

は本当は五逆罪を犯してゐる者だぞ、誹謗正法の罪があるのだぞと、かう云はれてみて、びっくりして、そんな者だとは思はなかつたが、何故あんなことを云はれるんだらうと静かに自分の心をふりかへる事になつてまゐりますと、なる程、自分は五逆罪を犯してゐるのである、誹謗正法を犯してゐるのであると云ふことがわかりますのであります。これは私の実際の親なんかに対しての自分の問題をさらけ出して申し上ぐれば、尚はっきりすることでありますけれども、あんまり私のその点は浅間しいのでありますから、これはまあ容赦をして頂き度いのであります。今頃になつて思ひますと、ずつと親に双向ひ続けてゐるのでありますあの時あ〳〵であつた、この時かうであつたと、自分の根本の心根はかうであつた、本当に親に対して五逆罪を犯してゐるのであります。

打つてこらしてどうしてもまことの道に入れねば止まないといふ仏様の親心が第十八願と此の願成就の文とにはっきりとあらはされてある、それが唯除五逆誹謗正法といふお言葉となつてゐるのでありまして、これは一方から言へば仏の智慧の光が徹して来て下さるのであります。私どもはなかなか見えない自分の姿が此のお言葉によつて見えて来るやうになるのであります。智慧は折伏、慈悲は攝受と言つても宜しいのでありませう。その私どもの逆悪の姿の悉しいところは、あとで悲化段においてお説きになつてゐますから、その時にまた私自身としての感じの上から申述べますやうになりませう。今晩はこれまでにしていただきます。

佛と人

池山榮吉 著

昨年先生の十七回忌には「絶対他力と体験」が発刊され今回引き続いて「仏と人」を丁子屋書店から刊行されました。前者は四十二歳の御時の先生の御入信の懺悔録とでも申すべきもので、後者は先生の御晩年の信味の溢れ、芳香の漾うてやまぬ名著であります。特に先生は歎異抄といふ山の何処かを何時も逍遥して居られる、だから先生とお遭ひするには歎異抄の山にお呼びかけ申せばよい、さうすれば必ず「オー」と応へて下さる。「仏と人」も結局さうした先生の縮図とも申すことができませう。

なほ池山先生の三部経とでも申すものは、歎異抄とゲエテのファストと、ニイチエの超人でありました、清沢先生の三部経は歎異抄と阿含経とエピクテータスの語録であつたと聞いて居ります。我が玉を礪く他山の石としてファストと超人は読破して居られました。「仏と人」にもそれが随所に散見せられることであります。座右に置かれて是非度々御身読下さるやうにおすすめ申し上げます。

京都市下京区油小路通花屋町上ル　丁子屋書店。

定価　参百円。送料　三二円。振替、京都一四五〇番

無義爲義の念佛

榊原德草

歎異鈔の第一章から第十章の前半までは、親鸞聖人の常日頃の「御物語りの趣き」を、唯圓大徳が「耳の底に留る所」とおつしやつて書き残された所である。御物語りの趣きといはれるから聖人が御日常にお話しされた御言葉のままといふのでなくて、長年月に亘つて聴聞された後に、肝に銘じ心に刻まれた御言葉の精髄であらう。或は蓮師堂で数人の御同朋を前にされての聖人のお話、又は太子堂であつたり、賤が伏屋の囲炉裏端での御讃歎であつたり、日を渡り年を重ねて、唯圓大徳が身に泌みて頂いたその御言葉の精髄が、あのやうに生命かがやく聖人の御声そのものの写しとして書き誌されたのであろう。他の御仮名聖教にも同じ意味の御物語りは拜読されるけれども、その円やかなところ、その香ばしいところ、そのつや〳〵した所、寸分加減の出来ない……不増不減の味はひが満ちみちた御物語りの調子は、恰度、磨いた玉と磨かない玉との違ひがあるやうに思ふ。

「故親鸞聖人御物語りの趣き」を耳の底に止められた唯円大徳のおかげで、七百年後を私達、これから後の多くの人々、共に倶に直々聖人に御話を承つてゐる趣きを体現させて頂くことの有り難さは、まことに身に滲みるのであつて只々唯円大徳の御徳に感泣の外はない。

さて、第十章は前九章を総結し且第十一章以下を開く章と云はれるが、この第十章前半の「念仏には無義をもつて義となす、不可称、不可説、不可思議の故に」との聖人の御物語り、つまりこの章の御言葉について私にはこんなことがあつた。

明けて去年のことになるが、秋の末か冬の初めのこと、一日の勤めを終つて電車にのる、あゝこれで一日の勤めから開放されたのだと、心軽く家路をたどる、電車を降りていよ〳〵家路近くに足の運ぶ私には又「家」の騒がしさがいとはしくなつてくるのである、やうやく解き放たれた一羽の鳥が大空高く舞ひ上つたはよいが、さてそのねぐらが

近づくにしたがつて、その寝ぐらは又束縛の巣に思へてくる、——実はこんな感懐は今日に始つた事でなく、大体いつでものことなのであるが、そして大低さうした場合には、お念仏がフト申されてくる、さうするとそのお念仏のお力によつて泌々と自分のやうな仕様のない者が、その仕様のないまゝに勢づけられて重い足どりながら心いき〳〵と家に帰るのが常である。

所がその日は、同じやうなことであつたのだが、身体の調子が餘り快くなかつた故でもあるのか、とに角、例の坂の中腹の峡になつたあたりでフト称へられたしみ〴〵としたお念仏が「うまかつた」のであつた。私は自分乍ら変だと思つたほどお念仏が舌に味として感ぜられた、常に「お味はひ」と人にも云つてゐるのに念仏の味がこんなに感じたことはなかつた。三河の同行が身に感入し心の底に響く御法話にあうた時「うまいなァ」と思はず漏らされるが、この味ではないかしらんと思つたことだつた。味はひとはよくも申し伝へて下さつたこと、まことにお念仏は法の味がするのである。舌に感ずるやうな今の場合のみをいふのでなく、もつと広く深い様々な味はひ、或は高く或は低く、時にはさつぱり何ともない味、一切合切含めてお念仏は味はひで頂く。御本典の化土巻に「弥々これを喜愛し特にこれを頂戴するなり」と聖人が仰つしやるお念仏は、平たくいへば、頂いたお念仏のおいしかつた趣き、身一杯に満喫したお念仏の味のよさを、ありのまゝに表白欣喜されての御述言と拜される。三毒五欲のあばら家へ、思ひもよらない珍味が山と運びこまれて、さあどうぞお上り下さいと差し出された光景を見るが如くである。又信巻に「欣求浄刹の道俗深く信不具足の金言を了知して、永く聞不具足の邪心を離るべきなり」とお訓し下さるのも、畢竟それはお念仏は味なので、聞き足らぬ、解らぬ、のわが計らひではないのですとのおさとしであると拜される。

味がするといふことから思ひつくのは、「乳味・酪味・熟蘇味・醍醐味・甘露味」の五味のことである。仏の説法を小乘より大乘に、漸教より頓教に、五つに判釈して、いろ〳〵と仏意を説かれた祖師達が、一躍して、こんどは五つの味にそれ〴〵を当てゝ結ばれるところ、その一つ一つに「味」といふ言葉をもつて仏の教へを顕はして下さることに、今更驚き入つたことであつた。詰る所、お念仏は味である、こゝでいふと甘露の味である。諸々の味のうち最上の味が、南無阿弥陀仏である。

こんなことは度々はないのであらう。その後今日までまだ再びあんなお念仏の味に遭ふことがない、欲を云へばもつと度々あんなお念仏の味はひを頂いてみたいなと、これからの生涯を当てのないまゝに楽しみにしてゐる愚かな私である。

さて第十章の「無義をもつて義となす」のお念仏である。私は從来この章の「無義為義の念仏」は頓りなくてならなかつた。聖人は「念仏には無義をもつて義となす」と恰も「お念仏だけなのです、外にはなんにも仕掛けはないのです」と仰せになる。丁度第二章において「親鸞におきては只念仏して云々」と仰せられたと同じやうに、こゝでは「念仏には無義をもつて義となす」とおつしやるのである。そしてそれが合点のゆかない顔の私に聖人は言葉をついで「不可称、不可説、不可思議の故に」と、おしかぶせるやうに言はれるのは、少しも手応へのない私に、もどかしく且憐れに思はれての重ねてのお訓しなのであろう。——「まだこれでも、御廻向のお念仏がわからないのかな」と聖人は私のやうな計らひづめの困つた奴に、かさねがさねのおさとしである。然しどうしても私にはとりつく島のないのが、無義為義の念仏なのであつた。ところが、身にしみるお念仏の御催しにあづかつてどうやら「無義をもつて義となすお念仏」との聖人のおさとしのどこかに触れたやうな感がする。

私達日常の日暮しでは、うはべの姿は千態萬様であつて、電車の中の人々、道行く人の後姿、或は何の屈托もない人、といつて金輪際動ぜぬところから生え出たやうな、明朗活達といふやうな、顔にも、姿にも、遭ふことはできない、何かそこにはものにつかれたやうなあくせくした姿か、洞窟のやうな淋しい蔭をまとつた顔のみ満ちてゐて、心豊かな人の姿は一人もないといつても過言ではない、私が、論より証拠その代表者なのである。勤めに出る時もいそ〳〵と門を出る私ではない、行かねば生きて行けないからである。帰る時は放たれた喜びで一応勢よく家路を急ぐが、さて家に近づくと家族が待つてゐる、まことに和やかな文句のない妻や子供ではあるが、さて疲れた私へまたあれやこれやと生活の煩はしさがその蔭にうごめいてゐる、それに私はとらはれて行く外はない、どことても真から底から慰め労つてくれるところはこの世の中には寸土とてはない。

「しかるに、仏、かねてしろしめして、煩悩具足の凡夫と仰せられたることなれば」、聖人は直々に私にさう訓へて下さる。私はこのお言葉で血が通つてくる。ほんとに私は煩悩具足の凡夫である。「煩悩具足」とは、「煩悩ばかりでできてゐて、その外は何もない」とのことである。出て行く時も帰つてくる時も一日中煩悩を煩悩と気付き得ぬ、まことに煩悩の外に何一つない凡夫である。その仕様のない私にお念仏がフト催ほして下さる、まことに他力自然の御廻向のお念仏が訪れて下さる。そこで私は生気をとり戻すのである。慰められ、労られ、光を与へられ、重い足が自然に活気を帯びてくる。ほんとにお念仏は賜るもの、頂

戴するもの、御廻向下さるもの、即ち、とかくの計らひなき、仏の御計らひのまゝであり、お念仏の訪れ下さるまゝであつて、義なきを義とするお念仏である。

こゝで「義なき」とは、吾が計らひをはなれたことで、それがそのまゝ如來の御計らひであるから、それを「義とす」と仰せになるのである。唯信鈔文意に「自力の心をすつ」の條に「やう〳〵さま〴〵の大小の聖人、善悪の凡夫の、みづからの身をよしと思ふ心をすて、身をたのまず、あしき心をさがしてかへりみず云々」とあるがその「すて」「たのまず」「かへりみず」が、わがはからひを離れることで、そこに如来の御催しがあり、南無阿弥陀仏を頂くのである。

この第十章のお念仏の味をもつて、即ち不可称、不可説、不可思議のお念仏の御功德を感じて、ひきつゞき浮ぶのは、これも常に読みにくかつた第一章「弥陀の誓願不思議に助けられよゐらせて云々」の全章が「……弥陀の本願をさまたぐる程の悪なきが故にと云々」の終りまで、無義為義の御念仏と表裏一体をなして味ふことができると思ひついたことである。第一章は他の九章に比べると余りにも大きくてスル〳〵と脱けて行つてしまふやうな感じがする。どこから身につけていゝのか手のつけられない。例へば父親の洋服を子供が着たやうで、ピツタリ身につかないのが第一章である。ところが無義為義のお念仏、なんともかとも、はかることも、とくことも、心に思ひはからふこともできない広大無辺のお慈悲のお念仏、不可称不可説不可思議のお念仏を日頃の「煩悩具足の自分」をもとでにして、そこへ聖人から「南無阿弥陀仏一つ」と承ると、大きな第一章がお念仏の餘香として身についてくる。ほんに「念仏にまさるべき善もないのである、又本願を障げるほどの悪もないのである、」との聖人直々の仰せがお念仏のうちにきこえてくると感じたことである。

義なきを義とするお念仏と仰せになる第十章の聖人は、前九章のどこでも或は表に或は裏に、このお念仏一つを或は秘め或は高らかにかざしていられる。第二章の「親鸞におきてはただ念仏して弥陀に助けられまゐらすべしと、よき人の仰せをかふむりて信ずる外に別の仔細なきなり」とは正しく無義為義のお念仏を高らかにかざしていられる聖人である。第三章の「善人なほもて往生を遂ぐ、いかにいはんや悪人をや」との仰せは、このお念仏を秘めて、その中から仰せになる聖人である。表に出たり裏にかくれたりはするが念仏一つが第一章から第九章まで貫いてゐる。

歎異鈔と聖人とは一つであり、また念仏と聖人とは一つである。だから歎異鈔の聖人の仰せは皆お念仏で解けてしまふ。池山先生の「よき人の仰せに聞いた極み」がこのお念仏であり、又それは「信の告白の要め」即ちお念仏であ

り、そしてそれはまた「人に信を勧める奥の手」の「南無阿弥陀仏」である。「他力をたのみたてまつる悪人、もとも往生の正因なり」との第三章後半の仰せを承ると、これも亦南無阿弥陀仏が最後の拠り所であつて、何としても落ちつけない乱れ心が御廻向のお念仏一つで調伏され、法の津沢を得て和らぎ、解きほぐされてくる。第四章、第五章、等々、続いて第九章の「よろこばぬにて、いよ〳〵往生は一定と思ひ給ふべきなり」の、なだめつ、すかしつ大悲の限りを尽されて御相手下さる聖人のつゞまる所は、弥陀にはからはれて参るお念仏一つに帰してしまふのである。

聖道門の人はみな
自力の心をむねとして
他力不思議にいりぬれば
義なきを義とすと信知せり

わがはからひの内から覗き見して、仏智をはからはうとするのは、何と云はうと自力聖道の心根である。吾が身のまゝならぬを計らひ、仰いで仏智の不思議をはからひ、あゝもならない、かうもならない、あゝでもあらうか、かうでもあらうかと、毎日々々来る日も去る日も計らひの外に一歩も出られぬ自縄自縛の吾々に、無義為義のおよび声が訪れたくてたまらないのである。これはまことであつて決して虚偽ではない。第二章に聖人は「弥陀の本願がまことであるなら釈迦牟尼仏の説かれたこともまことであり、善導大師、法然上人、ひいては親鸞が申すところもまたいつはりではあるまい」と仰せになり、一貫して真実の光被、怒濤の如く押し寄せる大慈大悲の御催しは、切々と昼夜を分たず只々救ひたくて救ひたくてたまらないのである。憐れでならぬ私に対つて、救ひたくてたまらない仏の真実が「念仏には無義をもつて義となす、不可称不可説不可思議の故に」と矢も盾もあらばこそ、直々に「お念仏一つなのです、たゞそれだけなのです」と膝を寄せ両手をついて「オネガヒダカラ　スグキテオクレヨ」と、頭を下げられるのである。

噫！…まことに、聖人の仰せ「念仏には無義を以て義となす」の、このお念仏は、聖人の生涯の出発点であり、又その終着点であり、燦として光は十方に満ち、そのたぐひなきおいのちは三世を通貫して七百年の今日に生きてゐる。聖人は念仏にいのちを得られ、念仏に全身心を抱擁された。往生極楽のかなめ、業海航航の指針は決定して不可称不可説、不可思議のお念仏一つに極まるのである。

くりかへして云へば、たゞこゝで大切なことは、無義為義のお念功が訪れたくてたまらない、即ち如来聖人の悲心の目指す吾等はどういふものかといふこと、これである。この私とは、煩悩具足であり、何れの行も及び難き、地獄は一定すみかの私である。常に沈み常に流転して、ちよつとも出離の縁のない私、瓦か石かつぶてのやうな、完く獣目な私である。だから仏法に遭へば仏法を我ものにし、それをもつて他の批判の材料にしてしまひ、何でもかでも、世法であれ、仏法であれ、わが身に縛りつけて、無明の鬼の主人公となつてしまふ私、どこまでいつても自我を押し立てゝ他をとりひしがねばやまない永劫流転の旅人の私である。この私に対つて無義為義のお念仏が対面したくてたまらないのである。不可称、不可説、不可思議の甘露の味をいつぱい満たして、与へたくてたまらないのである。

よき人とは、この無上の甘露味を措し気もなく与へたくて仕方がないお方であり、又裏から云へば、煩悩具足の凡夫の心にクツキリと写り映えて萬劫消えない、忘れえない大事な大事なお方である。

「ひそかに憶案をめぐらして、ほゞ古今を勘ふるに、先師口伝の真信に異ることを歎き、後学相続の疑惑あることを思ふに、幸に有縁の知識によらずんば、いかでか易行の一門に入ることを得んや、全く自見の覚悟をもつて他力の宗旨を乱ることなかれ。」

これは歎異鈔の総序の冒頭に書かれた唯円大徳の悲心止むことなきお訓しであるが、「幸に有縁の知識によらずんば」とある、この「有縁の知識」がよき人聖人であり、「先師口伝の真信」が無義為義のお念仏、「易行の一門」、只念仏である。私の身にしみとほつて、いのちとなつて通つて下さるお念仏である。母が子供に嚙んで、口うつしするお念仏、口伝の念仏即ち真信である。

唯円大徳の口へ、聖人自ら、口移しされた口伝のお念仏は、甘露の味のお念仏であつて、全く説明やそれをきいて理解したゞけの解つたお念仏ではない。

だから、如来聖人の仰せによつて、私のはからひが掃き浄められてしまひ、素地のまゝの、智慧も行もかけはてた地はだに滲みこんでくるお念仏である。唯円大徳が「先師口伝の真信に異ることを歎き」こゝに歎異鈔を残して下さつたことの、つまる所は、計らひなき口移しのお念仏を綿々として後代の私達に与へたいために外ならないことに思ひ至るとき、間違ひづめの毎日を暮す私は「悲喜の涙」と書かれた唯円大徳の御心に胸つまるのである。が同時に間違ひづめの毎日の、内に外に訪れて下さるお念仏にまた心は広々として軽く、生き〳〵として活気を与へられることである。

唯円大徳の残された歎異鈔を通じて、今こゝに生々躍動して下さるのは、聖人の御いのちであり、唯円大徳の悲喜の涙を押へて書かれた筆の動きであり、父の如く母の如き聖人と唯円大徳の護り伝へ与へて下さるお念仏の味である。よき人とお念仏、お念仏とよき人、そして私、もうこれよりほかに云ひやうのないお念仏である。

編集後記

新緑の初夏の候となりました。先月は相対性原理の提唱によつて世界の人々の耳目を驚かし、次に原子爆弾で世人を震動せしめ、晩年は人類の平和を切に念じつつアインシュタイン氏はその光芒をおさめて地を去りました。

科学上の相対性原理は同時に精神界の相対五分五分性にも通じるものでのり、その結果は最有力なもので相手を制する外に平和の道はないとなり、原子力による統制となつたのでありますが、更に進展してやまぬ人類の力は平衡を保つたかに見えて又破れ、破れては又平衡を保つといふ、斯様なことが人類のあらう限り繰り返されることでありませう。その長い人類の歴史の流れの上に泡沫の生を受けた私共は、その打ち寄す波の一切を我身にうけて、それに消されず、滅せぬ光を身に頂いて、心のよるべとさせて頂く外に生きやうはありません。アインシュタイン氏の遙かに望んだ人類の平和も、帰するところ、私共に絶対のよるべを早く得よとの勧めでありませう。

△福島先生の願成就文講話はこの稿で終りました。次回からは三つの往生についての講語を頂きます。幸にも四月八日の聖日に福島先生の御来庵を頂き有縁の方々と、死の問題についての御信嘗を頂つて頂きました。長く御令息御入院中で、七ケ月振りの御来講を、お忙しく御難儀な中を押して恵まれましたことを深く謝して居ります。

東京都調布市仙川町七九四番地がお住居であります。

△無義為義の念仏の原稿は、長年歎異抄を肌身離さず御身読なさつていられる榊原さんの甘露味を頂つて下さいました。聖教よくれ〳〵と蓮如上人がお勧め下さいますが、何度も拝読して居りますうちに、何かの機縁で、大きにうなづかされるものであります。分つた解らぬで表面だけを走つてはいけないといふことをいよ〳〵知らされます底のなく深い仏法に底をいれてはなりません、それでは法の生命が枯渇します。又榊原様の筆の背後に池山先生が陰見せられるのを感じますのは私一人ではありますまい。御住所は有名な苔寺の近くで、京都市右京区山田開町浄住寺であります。又池山先生の「仏と人」を取次いで下さいますことも申添へます。

御案内

毎月一、二、三、日曜午後一時半
日曜講話。　一道会館

毎月廿四日午前、午後。
法話会。
昭和区小櫻町教西寺

五月二十九日、日曜午前十時。岡崎市中町
東別院、同朋會館。
歎異鈔讃仰。

慈光　第十卷　第四号　昭和三十年五月十五日発行（毎月一回十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可

定価　一部　十二円（送共）
半年　百円（送共）
一年　二百円（送共）
名古屋市南区駈上町二ノ二八
編集・発行人　花田正夫
名古屋市千種区千種町馬走二
印刷人　奥川正生
名古屋市南区駈上町二ノ二八
発行所　慈光社
振替口座名古屋一〇四七〇番